



# 子どもの村東北

# News Letter



うちには、僕の席、僕の花碗、僕のご飯があります。

第2回

## おじゃまします。

初めて村を訪れた私と、村の人たち

「子どもの村東北」にある家庭の風景は、子育てに励むどの家庭とも何一つ変わりません。例えば、好き嫌いが激しい子どもと、それに頭を悩ませる親の姿…。育親さんとの会話の中からは、そんなありふれた姿がある日常のひとコマが思い起こされます。「うちの子はね、野菜をまったく食べないの。だからうちで作るカレーの具材に、野菜は一切なし。献立には毎回頭を悩ませていますね(笑)」。ここで生活をする子どもたちの中には手作りの

味を知らずに育った子も多く、反抗するために自分のために作られたご飯に手をつけないことがあるのだとか。「私が作った料理に“まずい”ってはっきり言われたこともありますよ。でも、お預りしている子は不満が溜まって心がパンパンになっていて、いろんなことが許せなくなるからそんなことを言うってしまうのかもしれないですね」。

とはいえ、やはり手作りの味は心をほぐしてくれるもの。子どもからこんな言葉を掛けられた育親さんもいます。「この前『今日は何が食べたい?』って聞いたら、『手作りのお惣菜が食べたい』って言われたんです。子どもが好きそうなカレーやシチューじゃなくて、私が作る“昆布と油揚げの煮物”とか“ほうれん草のおひたし”

がいいって。あれはうれしかったですね。『結婚したい』とまで言われちゃいました(笑)。安心できる場所があり、安心できる大人がすぐ側にいる。そして、あたたかいご飯を食べられる。愛情を込めた料理の一つひとつが、子どもたちの心を少しずつ穏やかに変化させたのかもしれない。

家庭の中心にある食卓は、一方から見ると戦いの場。しかし別の方向から見つめると、その場に集まる人をつなぐ場にもなっています。今日もまた、子どもの心とお腹を満たす料理が、そして育親さんたちが悩み抜いて作り上げた料理が、あたたかな湯気を上げて食卓に並んでいるでしょう。(文・及川)